掲載日:2015年08月07日，面名:２社，記事ID:KIJ20150807_M003800120AE09002
(C)新潟日報社

伝えたいヒロシマを

＜上＞

使命

家族失ったあの日

本県高校生らに体験語る

にいがた Niigata 戦後70年

青空が広がる暑い日だったという。1945年8月6日午前8時15分。米爆撃機B29が、人類史上初めての原子爆弾を広島に投下した。一発の爆弾が人々の営みを奪ってから70年。被爆者の平均年齢は初めて80歳を超えた。「世界中から戦争が、核兵器がなくなりますように」。広島には、高齢を押して語り続ける被爆者がいる。若い世代に関心を持ってほしいとボランティアを始めた県人もいる。月日が流れても、変わらない「ヒロシマ」の思いを伝えたい。

×　×

14万人もの原爆犠牲者を悼む祈りに包まれた6日の広島市・平和記念公園。式典で平和宣言を読み上げる松井一実市長を、河内政子さん(86)＝広島市東区＝はじっと見詰めた。「当時16歳の女性は『家族、友人、隣人などの和を膨らませ、大きな和に育てていくことが世界平和につながる』と訴えます」。松井市長が引用したのは、河内さんが子どもたちに語り続けてきた思いだ。

「私の思いも乗せて、世界に通じてほしい」。平和宣言を聞き、河内さんはあらためて願った。

高等女学校4年の16歳で被爆し、両親と姉を亡くした。戦争と原爆の現実を子どもたちに伝えようと、体験を語り20年ほどになる。6年前からは、毎年広島を訪れる敬和学園高（新潟市北区）の生徒にも語る。

4日は生徒18人に「戦争は絶対にしてはいけない」と精いっぱい訴えた。

70年前、河内さんは爆心地に近い市街で暮らしていた。しかし前日の5日、「自宅が空襲に遭ったら一家全滅だから」と、両親の勧めで約2キロ離れた祖母の家に泊まっていた。

そして6日午前8時15分。「カメラのフラッシュが何百何千とたかれたような強烈な光」の後、屋根と壁土が落ち真っ暗になった。なんとか外に出たら体のあちこちにガラスが刺さっていた。両親や姉を探すため翌日自宅に帰ろうとしたが、道や川が遺体でふさがり戻ることはできなかった。

3日後に戻った自宅では、玄関で父が、台所で姉が白骨となっていた。母は上半身が黒く焦げ、下半身が白骨になっていた。「頭が真っ白になった」。自分も死のうと家族の骨を防空ずきんに入れ、川に入ろうと歩いた。でも川に下りる石段は遺体で埋め尽くされ入ることすらできなかった。

家族、友人、隣人、多くの人を亡くした。「こんな思いを今の子どもたちにしてほしくない。国と国とのけんかで命を失ってほしくない」と強調する。

河内さんの思いを、本県の原爆被害者の会の山内悦子会長(86)も共有する。2人は女学校時代の同級生。戦後、お互いの消息を知らなかったが、20年ほど前に広島で再会し、手紙や電話で交流を続ける。広島で、新潟で子どもたちに原爆の恐ろしさを語る2人は「お互いここまで生きてきたから伝えていこう」と支え合う。

被爆から70年。河内さんや山内さんの思いは、平和な時代に生きる若者に引き継がれる。4日に河内さんの体験談を聞いた敬和学園高の五十嵐理浩君(17)は真剣な表情で語った。「僕らは河内さんからバトンを受け取った。そのバトンを(次の世代に)つなげていくのが使命だ」

「被爆者の多くは亡くなっていっている。体力の許す限り、体験を伝えていきたい」と語る河内政子さん＝6日、広島市中区の平和記念公園